

羅賓社版

日本現代文學
全集

28

德田秋聲集

日本現代文學全集・講談社版

28

徳田 秋 聲 集

日本現代文學全集

28

徳田秋聲集

編集
伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙吉
山本 健吉



昭和37年9月10日 印刷
昭和37年9月19日 發行

定價 500圓

© KODANSHA 1962

著者 徳田秋聲

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽町3〜19
電話大塚大代表 (941) 3111
振替東京 3930

印刷 大日本印刷株式會社
寫版 株式會社 興陽社
製本 株式會社 大進堂
製函 株式會社 山紙器所
株式會社 第一紙藝社
背表紙 株式會社 石井
クロス 日本クロス工業株式會社
口繪用紙 日本加工製紙株式會社
本文用紙 本州製紙株式會社
函貼用紙 安倍川工業株式會社
見返し用紙 三菱製紙株式會社
扉用紙 神崎製紙株式會社

徳田秋聲集 目次

卷頭寫眞

筆蹟

犠牲……………五

新世帯……………二

媾曳……………四〇

あらくれ……………四五

菊見……………一三〇

蒼白い月……………一三六

花が咲く……………一四三

風呂桶……………一四七

挿話……………一五〇

折袴……………一六

白い足袋の思出……………一六

德
田
秋
聲
集

生きのひき

又々々々々

目も心も

秋

犠牲

一

四方八方へ散らかつてゐる弟や妹が、幾年振かでドカ／＼と一緒に集まつて来たのは、つい此の三四日前の事である。何時も寂しい宇野紇の家は、盆と正月が一時に来たやうに、急に賑つて来た。

弟妹は都合四人、中二人が女、上と下とが男で、一番の年嵩が三十六、下が廿七歳である。一番の弟は、養子に行つたから、名を小林敬三と云つて、地方で可也の病院長をしてゐる。其の次の妹はきん子と云つて、紇の舊友某氏の夫人で、良人は、中央の教育界で鐙鐙の一人物である。次の妹は此も或地方の検事の夫人で、名を周子と云ふのだが、一番末の弟が當時東京で盛名を馳せてゐる西洋畫家で、其の名を淑夫と云ふのである。紇の直ぐ下に今一人弟があつたが、軍人に成かけて餘程以前に夭折したことは、唯今の如く人々の胸に新な記憶である。それで紇はと云ふと、此の土地で二十年近くも小學校に教師をして、其年四十二、頭の天邊が大分禿げかゝつて、活氣も血の氣もない顔に夥多皺が寄つてゐる。つい此七八年前までは獨身で、まだなか／＼弟に劣けぬ意で、始終何か目論んでゐたが、結婚してからは頓と其様氣もなくなり、職務の餘暇に少許の鶏など飼つて、病身な妻と二人、約やかな生活を續けてゐる。

しかし紇の胸には一つの大満足がある。其は慥までの名譽を荷つてゐる弟妹を自分の力で世間へ押出した事、少くとも今日の地位に

登るまでの其の階段の第一歩を手を取つて導いてやつた事、語を換へて言へば、財産も門地もない高が百石ばかりの小士族の嫡男に産れて、而も父は生涯酒と賭と、人を恵むことと、横柄なことと、潔白なことの外、何の能も技術もない人間であつたから、自分の學事盛を却つて一家の經營に當らねばならず、其の生活難の中心に立つて、五人の弟妹を提げて、夫々に普通教育（中には、尋中以上まで進ませたものもある）を授けてやつた事、而して其が皆な左に右社會の表面に立働いてゐることを思へば、彼の心も餘りに貧しくはなかつた。否大得意であつた。殊に父の十七回忌を機として、弟妹四人、女の方は双方で子供が三人、女中が一人あつたから、總て八人の賓客が、己がじゝ時様の服裝を着飾つて華々しく此の城下の町へ歸省したのは、紇に取つては、恐く自分が縣知事になつたよりも愉快なのである。

宇野の家は深い栗林の中にある。町續ではあるが、周は田圃で、其處此處にチヲホラ人家が見える。俸祿捧還の折、此へ引越して來たので、其栗の木を見ても、裏の流を見ても、菌の多い前の山を見ても、若くば二階の壁の樂書、昔も今も變らず咲いてゐる垣根一面の萩を見ても、同胞六人が、盛んに界限を馳驅してゐた生育當時の事が、直に頭に浮んで來る。

其の家は手狭でもあるし、汚くもあると云ふので、法要は寺で營むことにした。寺へは六七丁に足らぬ道であるが、其日は特に腕車を七臺詔へて一行十人賑かに家を出た。敬三は醫者だけに取澄したもので、薄出の駱駝メルトンのフロツクの縹子の裏をかへして、輕く車に乗ると、金鎖と、眼鏡の金縁とを閃かせながら、香氣の高い葉捲を煽らせて悠々と曳かせる。色は白く、鼻は高く、濃い口髯に屹と結んだ口、氣の小さい紇の妻が、始終怯氣づいて碌々親しい口一つつけぬのも無理はない。淑夫は羽織袴で、兄のドクトルから見ると、ずつと風采は下るが、自然な舉動のうちに、何處か沈着いた、氣品の高いところが見えて、其の綺麗な大きい目も平凡でない。き

ん子は一番貴族的の風をしてゐる。白茶の紋付の二枚袷で、帶も酷く高雅な縞縞を締め、金鎖に指環のダイヤなどを光せて、獨逸服を着た男の子を一人膝に抱かへ、額の長い顔に始終ニコニコと笑を含んでゐる。周子は姉よりは沈んだ方だが、縹緲は却つて此の方が好く、四歳になる女の子に、縮緬ぞツきの華美な姿をさせて、自分も廿三四位にしか見えぬ若裝飾である。

糺夫婦は其次に車を曳せた。いづれも質素な打拵で、糺の縁を取つた舊式のフロツクなどは、もう釦の被せ糸が取れて、色も赤茶け、肩に大きな皺が出来て、クシヤクシのホワイトの手首を氣にしながら、スツポリと古山高を冠つて前屈みに車に乗つた後姿は、後から續くきん子の女中が、クス／＼笑ひ續けてあつた位だが、髪の毛の薄い瘦細つた其の頸を眺めながら行く妻の目には何と映つたらう。けれど怒して、綺羅美やかに着飾つた弟や妹と一緒に町を通つて行く糺は、自分の事などは、少しも氣にならぬくらゐ、感謝の情が、胸一杯になつてゐた。

十月の初旬で空は薄曇り、町屋町屋の軒に寂しい日光が早や傾きかけてゐた。鐵道が敷けてから、年々寂れて行く此の町に、恁も盛装した紳士淑女を載せた車の續くのは、近頃些と不思議な事なのである。

二

寺から歸つたのは、雑木林に早や夕濛濛の立置める頃であつた。薄ら寒い夕風に、揺れ重りのする門田の稻、畑の畔に長髪を振亂したやうな蜀黍が、ざわ／＼と幽かな葉擦の音を立て、黄ばんだ様子の木の梢ばかり見える空に、渡鳥が忙しうに飛んでゆく。幽暗い栗林のなかへ入ると、其處は濕氣を持つた空氣が急に重く、落葉の軽い匂が、冷たく鼻に通ふのである。

腕車を降りた時は、皆な一樣に疲勞の色が顔に現れてゐた。中にもドクトルなどは、蒼い頬を兩手で擦つて、

「ヤア寒い／＼、名古屋とは餘程陽氣が違ふ」と呟きながら靴を脱ぐ。

「あのお寺の坊さんが又た大の話すきで、私眞實に痺を切らしてつた。」と妹のちか子が不平たらたらで座敷へ通る。

「あのお上人さんも、滅切年を取りましたね。」と姉も言ふ。

ドクトルは床柱に首を凭せて、長い脚をずいとし、大な欠をしながら、「もう老碌してゐるさ。あゝ同じことを繰返し／＼言ふのは、確に先が長くない證據だ。ア、他も親父の酒飲相手であつたんだが……………」

「眞實にね。加之私達よりか能く私達の家の事を知つてゐるんですもの。」

「ア、昔から記憶の好い坊主で、御維新前後から、今日までの町の歴史なら、あの凹凸の頭に不殘藏ひ込んでゐる。我々の顔を見ると、直に其の蟲干をやるんだから堪らない。」とドクトルは鼻の先で笑つて、

「さう言や、父が酷く困つた時に、己をあの坊主の弟子にすると云つて、相談に行つた事があつたつが、己は蕘々しくして、到頭じやく／＼張つて、行かずに了つた。父は餘程己を持餘したと見える。」と笑ひ出した。

「兄さんが坊主になつてゐたら如何でせう。」と妹も笑ひ出す。

「爾さな、其の方が或は好かつたかも知れん。何でもミツチリ學問をさせると言つてゐたから。然し、坊主も醫者も大概似たやうなものだ。」

苦蟲を嚙潰したやうな顔をして、兩手を組んで熟と聽いてゐた兄の糺は濃い眉をビクツと動かして、小聲で、「あの時は、私が大きに困つた。親父は、唯一人でも口を減すことを考へてゐるので、少しも當人の利害得失と云ふものを究めんのぢやつたから……………」

「あの時分から、衆が此方の兄さんに御苦勞かけたわね。」と姉がしみ／＼言ふ。

「あの時分でしたね、兄さんが始終夜遅くまで、二階で本を讀んで在して、赤毛氈一枚で轉寝なんかなすつて……私覺えてるわ。」

「それが丁度、町の家を賣つて、此方へ引越した時分だ。」とドクトルは少し前へ出て、今、嫂が汲んでくれた茶を啜る。

「阿母さんが泣いて在したことを覚えてゐるわ。」と姉が曇んだやうな目色をして言出した。

ドクトルは快活に「さうだな、もう二十幾年と云ふ昔だ。我々も年を取つたが、周の栗の木も随分大きくなつたね。今時分圍爐裏で栗を焼いて食つた樂みは忘られんな。」

と感慨の深さうな調子に、一同は着しく庭の方を見遣る。

「栗はもう何斗と云ふ收穫でせう。」

糺は重い口で、「さやう、二斗ぐらゐ取れるぢやらうか」と妻の方を向く。

「其位はありませう」と妻は淋しい顔に笑を浮べて、此も屈んで奥の方から軒の根に繁つた、一株の栗を見あげながら、

「今年は出來が悪くて未だ何方へも差上げませんが、明日は皆さんへ御馳走に栗の御飯でも拵ませうか」

「お美しいでせうね。」と妹は愛相らしく嫂の方へ首を傾けて、

「栗を送つて頂く度に、家の事を憶出しますんですよ。蘭狩などは、まあ何様なに楽しみでしたらう」

「其の癖今行つて見ると、其様でもないのさ。」とドクトルは香水の匂の高いハンケチを取出して鼻から口を拭き、

「栗拾ひに限らず、川狩に限らず、總てあの時代の事が、今から思ふと唯面白いで、お互に世帯の苦勞でもするやうになつちや、迎も彼様な心持にやれないのさ。」

姉は子供と一緒に縁側の方へ出て、「栗も然ですが、あの萩も相變らず咲きますね。」

「萩は淋しくて私何だか嫌よ。」と、妹も縁側へ出て、「それよりか、家に澤山鳳仙花があつたが如何なつたでせう。」

「鳳仙花、ありや俗な花だ。お前も裁判官の細君相當な事を言ふ」とドクトルは笑ふ。

「可いわ。何せ林は權利義務で固めた、殺風景な頭ですから。」

「さう憤慨せんでも可いわ。」と微笑して、

「林さんも、宇都の宮ぢや大分評判が好いやうだから、其うちには榮轉だらう。」

「何ですか、自分ぢやもう、官吏は可厭だからと云つて、事によつたら、東京で辯護士になるかも知れませんわ。」

「それも可からう。然し失禮ながら、林君は辯護士と云ふ柄ぢやないな。加之今休すのは惜い。尤も己なぞも、政府に備はれてゐるのは、熱々可厭になつて、如何かして一つ、獨力で病院を經營して見たいと思つてゐる。」

きん子は部屋へ入つて來て、「そんな事を言へば、此方の御兄さんなどは如何するのです。二十年の餘も、一つ職業を續けて、少しも不平を被仰らないぢやありませんか。」

「然でもないさ。」とドクトルは打消して、「今でこそ恠して村學究であられるが、元はなかく野心のあつたものです。八九年前に一度事業熱に浮されて、手を焼いたのをお前は知るまい。二十二三時代に、衆を置いてき堀にして、東京へ飛出した騒なども記憶してゐるさ。」

「そりや若い時分は、誰しも一度や二度は其様な事もありませうよ」ときん子は至つて夷かな然し何處か確りした調子で、故意とらしからず反抗を試みる。

「ですけれど、御兄イさんは、概して大人しい方ですわ。大澤などは始終讀めてゐますわ。」

「そんなら、もつと取立て、切めて文部省へでも使つてくれたら可いぢやないか。」とドクトルは少し冷し氣味で、

「兄さんなどは、實に割の悪い人なんだ。」とツケ／＼言ふ。

きん子は少し顔を赧めて、「ですけれど、大澤は其様主義ぢやな

いんですもの。」

「ぢや、何様主義か。身最負を爲ないと云ふ主義か。」

「いえ、然ぢやないんです。畢竟教育家が、一身上の都合で、色の野心を抱くのは可けないと云ふんです。小學校の教師が、中學の教師に昇進するなぞと云ふことは、些と名譽のやうに聞えますけれど……………」

「解つた」とドクトルは氣捷く領いて、「そりや畢竟教育家の杓子定規と云ふものなんだ。其杓子定規で隅から隅まで推して行つた日にや、社會が宛然お重箱のカンテンのやうに凝結して了ふ。」

「秩序と云ふものは、一體然云ふものぢやないですか。」

「秩序の形式は然云ふものか知らんが、此の活動の劇しい社會は然うは行かん。殊にいくら教育家だつても、一箇の活きた人間である以上は、全然教育の道具として使はれてる譯にも行くまい。」

「兄さんは、それぢや教育家の天職を侮蔑して在しやるのですもの。」

「いや、侮蔑せんから……………」

「まあ宜しい。」と糺は些と身動きをして、「私はまあ此で、何等の不満も不安もないから、其で可いとしておかうではないか。何だか私のことから、議論に花が咲いたやうぢやから。」

先刻から見えなかつた淑夫の姿が、此の時ひよつこ縁先へ現れる。淑夫は手に一と束の草花を持つてゐたが、何れも野生の、色も香もない草ばかりであるが、大事さうに、莖のところを紙に裹んで、ステツキと一緒に提げて來た。

ちか子は胡散くさい目色をして、「何です其様なもの！」

「ハ、畫師にも植物採收の必要はあるものと見えるな。」とドクトルも聲をかける。

「何に、其様な譯でもないですが……………」と淑夫は手洗鉢で手を洗つて、上へ上つて來る。

蒼い襟裳は、もう重苦しく檐端まで迫つて來て、奥の方にゐる人

の影は、次第に薄くなつてゐた。ランプの來るまで、部屋は唯森としたもので。

糺は忘れてゐた鶏の始末を爲に、裏へ立つて行く。

三

其晩は十時過まで酒を飲んでゐた。靜な栗林の奥から何時までも笑聲が洩れて、灯影は幾ど徹宵射してゐた。糺は行けもせぬ口を、妄に弟に勧められて、もう減茶々に酔つてしまつた。無論自分にも不思議なくらゐる酒が美かつた。美しいといふよりか、寧ろ興に乗つて飲んだ。

初めはチビリ／＼、氣味無さうに猪口を嘗めるやうにして、口數も利かず、面白いでもなく、面白くなくてもない顔をして、時々ニヤ／＼笑ふばかりであつたが、臆て弟達が酒杯を擧げて、熱心に自分の健康を祝してくれた時分には、感窮まつて漫に涙が出た。

彼は目を輝かして、何時にない慨然とした聲で、

「此の場に、唯一人亡つた丈作が居てくれたらばと私は思ふ。」と叫んで顔を背向けた。

此の熱心な一言で、座が些と沈んで來る。

ドクトルは又兄に注いでやつて、「爾う／＼、丈作兄さんは、なか／＼無責任な男で、今でも想出すが、父の葬式が済んでから、一同額を鳩めて、一家の善後策を相談したことがある。その時あの兄さんばかりは、一向平氣なもので、今にも自分一人で、一家六人を引脊負つて立つやうな大言を吐いたものさ、然し或は大いにやつたかも知れん。今頃は太佐くらゐになつて威張つてゐるかも知れん。鷗を抄ふのが名人で性質は父に酷肖だつた。」

「眞實に、あの兄さんは可怖いくらゐ度胸の坐つた人でしたよ。」

糺はグイ／＼飲はじめながら、

「左に右衆が大いに遣つてくれ、兄二人分もやつてくれ。私はもう年を取つたし、子供もないし、何の希望もない體ぢや。唯お前達の

益々發展して行くのを見てゐるのが、何よりの楽しみだで……。」と云ふやうな意味の語を繰返し、駈けてゐた。

細君も同じやうな事を言ふ。

きん子は嫂に一つ猪口を差して、「ですけれど姉さん、衆が左に右一人前になつたのも、畢竟大御兄さんのお蔭なんですよ。」

「爾うでもございますまいけれど……。」と嫂は榮えない顔をして、「私共は根ツから満りませんですよ。皆さんは何様なに面白くてお在なさるでせう。お話を伺つたばかりでも、もう氣が浮々するくらゐですよ。」

「まあ、其様な下らんことを言ふな。」と軋は意氣軒昂の形で、「私は何にも出来ぬ人間で、其の無能な處が亡つた親父に酷く似てゐる。けど、恚う運命に服従するまでには、私も相應に悶々も脚掻きもしたものだ。私に少しでも功があるとすれば、自分に打克つたと云ふことぢやうと考へてゐる。自分に打克つて、左に右宅に粘着いてゐたと云ふことが、今となつて見ると、大變に可かつたかも知れん。」と言つて又飲む。

細君は呆れて其顔を見てゐた。

「兄さんに、あの時分家を飛出された日には、其こそ法返がつかなくつたでせうよ。」

「爾さな」とドクトルは大酒家だけに、相變らず落着いたもので、「己達は年が若くて、氣がつかなくつたけれど、今から思ふと、那の年頃で、ジツと引籠つてゐると云ふことは、左に右非常な苦痛だ。餘程の辛抱人か、意氣地なしでなければ到底出来ぬ業だ。處が兄さんは其の辛抱人であつたのだ。だから、我々は感謝しなけれやならんぢやないか。」

「あゝ云ふことを言つて煽てゐます。醫者なんてものは人が惡い。」

先刻から熱い息を吹いて、横になつて何か冥想に沈んでゐた淑女が、咽喉を擽らるやうな笑聲を洩す。而して、「ところで、誰が一

等幸福だらう」と藪から棒に訊いた。

「知れたこぢやないか。此方の兄さんが一等幸福さ。」

「然ですかね」と淑女は笑つて、「そんな平凡な事なら、僕でも考へる。僕は時々然云ふことは考へて見るけれど、如何云ふものか、矢張其の氣になれない。而して相變らず洋行でもしやうかと云ふ野心を起す。奇體ですな。」とノコノコ起きて來て、

「左に右、も一度大兄さんの健康を祝さう。」と言つて、コツブを差出しながら、姉に盈々と注す。

三人は齊しくコツブを舉げた。

軋は其ビールを三口ばかりに飲干して、「ヤア、有難う。」と膝に兩手を支いて、ガツクリ首を垂れ、「私や、こんな愉快な事はない。もう怎なりや幾許でも飲むで、……如何だ、這度は一つ皆の成功を祝さう。」と顫へる手にコツブを差出す。

細君は競々して、「それぢや、もう其限で……爾でない、明日またお勤めに障ります。」

軋は妙に口を歪めて、見當違ひに白眼を見据ゑ、「何を莫迦いふ？ 今日是一體何ぢやと思ふ。」と叱つけるやうに言つて、

「みんな是は私の弟ぢや。私は寔に滿らん生涯を送つたけれど、弟や妹は幸にして不殘かうして社會の要部に地歩を占めてゐてくれる。私はと云ふと二十年一日の如く、此の栗林のなかに跼つて、何一つ仕出來たこともなく……。」と語尾に力を入れて、勢のない笑聲を洩す。

ドクトルは少く興味索然とした面持で、蒼い顔に苦笑を浮べ、「まあ、其様なことは如何でも可いぢやありませんか。それぢや、も一つプロデツトをやつて、其から寝ると云ふことにしませう。」と底に残つてゐたビールを一息に呷つて、「兄さんは、其様なに弱かつたかな。」と首を傾げる。

「まあ可い、左に右愉快だ。大に飲まう。」

三人は又一齊にコツブを舉げて、カチャリと音をさしたるが、其の

響が何となく寂しく、閑とした四下が、妙に靜り返る。

四

今朝、糺は誰よりも先に目を覺した。板戸の節穴から覗くと、漸く幽白の曉の色が見え、蟲の音が疎に啼細つてゐる。横を向くと、妻はアングリ口を開いて其の癖呼吸遺弱々しく肉の落ちた目蓋と鼻のあたりを脂に光せて、狭くて長い顔が土氣色に有明の薄い光を浴びてゐる。昨夜敬三と淑夫とを二階へあげて寢してから、自分も臥床に就いたのであるが、其から又一時、女連だけ後に残つて、夜明近くまでベチャクチャ長話をしてゐた事は、臚に覺えてゐる。妻の顔には、確かに其の疲勞の迹が見えて、思倣か何處かに、不安の色さへある。

自分とは云ふと、酒の酔も残つてゐないらしく、頭の心はケツソリして、何だか物忘をしたやうな氣持だ。非常に酒を呷つたやうに思ふが、何のために呷つたのか判然してゐない。酷く興奮してゐたやうな形勢もあるが、如何云ふ動機で興奮したのか、其も隨張解らぬ。酒と云ふものを、昨夜初めて、思斷つて多量に飲んで見たが、自分にも面白いくらい行けた事だけは覺えてゐる。又慥も死んでゐた人間が、活復つたやうになるものなら、今まで可怕がつてゐたのは、些と愚に過ぎた沙汰だと云ふ感の起つたことも覺えてゐる。

けれど酒の興味も、自分に取つては眞の一刹那に過ぎぬ。眞實に酒に酔へる人間は、始終酔つた時の心持であるとしか見えぬ。敬三などは惡く其の部類で、酒を飲んでゐる時も飲まぬ時も、一樣に自體が活きて働いてゐる。傍で見て居ても、何か強い生存の力に觸れてゐるやうに思はれる。

糺は茫然こんな事を考へて、我と我が寂しさに魔はれるやうに、急に氣が細つて來た。

それで起出る勇氣もなく、一日缺勤した昨日の今日であることも、氣に懸つてゐながら、何時か其まゝ枕に就いたが、矢張寢ても

ゐられぬので、少時すると、妻を呼起して、自分も潔く床離をしてしまふ。

外へ出て見ると、朝濛霧は未だ深い。何時もの日課で、寢衣のまま物置の隣の鶏舎から鶏を出してやると、餌をやつて、其から落葉の掃除にかゝる。其が済むと、今度は井戸側で冷水摩擦を行つて、其の時分にはもう、閑りした栗林の奥にも、チロ／＼日影が射して來る。

栗林の露を潜り脱けると、押開いた野良には、うづ高い黄金色の稲田が、冷な旭にキラ／＼してゐて、淡い雲の布置を見ても、森の色を見ても、秋の氣が天地に充ちてゐる。

ふと靜な栗林の奥から、咳拂の聲が聞える。振顧つて見ると、敬三がネルの單衣の寢衣を着て、楊枝を遣ひながら、ブラ／＼やつて來る。

其の目蓋は未だ重さうだが、聲は爽然したもので、「今日は如何ですな、お天氣は……………」

「快い。非常に快い、今日は菌狩にでも出かけては如何かね。何なら銃獵も好い。」

敬三は胸にかゝつた粉を弾きながら、「いや、然もしてゐられませんが。今日はもう八日ですから、豫定よりか一日延びた勘定です。」

「そりや爾ちやうが、又と云つては、なか／＼出にくい。」

「いや、然し今日はお暇にませう。二番で立ちませう。また寛り伺ふ機會もあるでせうから。」

「それは又如何したものだ。今度は常時とは違つて、稀しく四人一緒に遇つたのぢやから……………」

「ですから、私も充分頂戴しました……………此上もう話もありませんから。」

「然かな、そりや田舎は満らん。第一一向食物がないので……………」

「いや其どころぢや有ません。非常に御迷惑かけて……………」
糺は其上止める手もなかつた。で本意なげに口を嚙むと、旋て急

いで家の方へ行出す。

「それではな、私は左に右一二時間休んで……其事を些と斷つて來るとするから……。」

家へ入ると、紬は細君に其事を告げて、倉皇外へ出て行く。

三四十分ばかりで歸つて來ると、もう皆な起揃つた處で、座敷に集つて朝茶を飲んでゐたが、更に紬の失望したのは、歸ると云ふのは敬三ばかりでなく、妹のちか子も、急に家が氣懸になつたと云ふので、一緒に立たうと言出した。と淑夫までが、歸りに日光へ立寄る豫定なのだから、是非一緒に汽車に乘らうと言出す。

一時間ばかり、其の間着で囁々してゐた。が、一度吹いた歸り風は妙に人々の心をそはつかせる。到頭きん子母子に侍女四人を遣して、左に右午後一時の汽車で、一同兄に別を告げる事となつた。

晝飯が済むと、三人は紬夫婦ときん子とに送られて、ドヤ／＼と家を出た。

紬は何となく、敬三が一同を率ゐて、此を引揚げるかのやうに感じた。其理由は、無論自分にも明かには言へぬ。が、唯何となく然う感じた。否、敬三に、何處か然した力の具つてゐるのが、紬には妙に一種の不快を感じしめるので。紬は今、きん子母子と妻と、四人打連立つて、ステーションから田圃道へと出て來た。汽車の音は次第に遠いで、半哩も先の樺色の森から、蒼い煙が、ムク／＼と噴出されてゐた。

午後の日影は薄り曇つてゐる。二町ばかり、紬は黙つて遅々と歩いてゐたが、昨夜酒の席上で、敬三の三男を養子にくれる話があがつてゐたやうだつたが、無論くれる意志はなかつたらしく、今日はその事は欠にも出さず、倉皇立つて了つたことを考へて、急に思出したやうに妹の手から、今年二歳になる男の子を受取ると、さも危つかしい手様で抱か／＼へて見る。

「おゝ好いこと、伯父さんに抱こして……。」と妹が横から愛す

「何て好い兒でせう。黙つて抱こして……こんな子が一人あつたら、ま何様に樂みでせうね。」と妻はシミ／＼言ふ。

紬も熟々同感であつた。而して不圖、二十年かゝつて積んだ三百圓某の貯金のことを憶出した。同時に、其金が、或日あの栗の林で、寂しく目を瞑る時の用意だと云ふ事をも思ひ浮べて、急に可恐しい暗い影に胸を封された。

* * *

落椿へばりついたる柄杓かな
敗れたる藥をそゝく馬蘭かな
月更けて市の小川に人泳ぐ
其方此方に蜘蛛の子を逐ふ圓居哉
大鼓かけし祭の村の新樹哉
むく／＼と瓜五つ六つ噴井哉
大藪や斜にかゝる天の川
羸々と霧の中行く列車哉
山里の夜すから揚くる花火哉
虫なんど鳴くや伽藍の眞晝間
白菊や大さ月輪の如し
葉の大なるを曳けば瘦せたる蕪哉

〔俳句新潮より〕

(明治四十年十月)

新世帯

一

新吉がお作を迎へたのは、新吉が二十五、お作が二十の時、今から丁度四年前の冬であつた。

十四の時豪商の立志傳や何かで、少年の過敏な頭腦を刺戟され、東京へ飛出してから十一年間、新川の酒問屋で、傍目もふらず減茶苦茶に働いた。表町で小さい家を借りて、酒に醬油、薪に炭、鹽などの新店を出した時も、飯喰ふ際も惜しい位クル／＼と働き詰めで居た。始終襷がけの足袋跳のまゝで店頭に腰かけて、モク／＼と氣忙しさに飯を掻ツ込んでゐた。

新吉は一寸好い標致である。面長の色白で、鼻筋の通つた、口元の優しい男である。ビジネスカットとか云ふのに刈込んで、襟の深い毛絲のシャツを着て、前垂懸で立働いて居る姿にすら、何處となく品があつた。雪の深い水の清い山國育と言ふことが、皮膚の色澤の優れて美しいのでも解る。

お作を周旋したのは、同じ酒屋仲間の和泉屋と云ふ男であつた。「内儀さんを一人世話しませう。好いのがありますぜ。」と和泉屋は、新吉の店が如何か成立ちさうだと云ふ目論見のついた時分に口を切つた。

新吉は直ぐには話に乗らなかつた。

「まだ海のものとも山のものとも知れねいんだからね。此なら大丈

夫屋臺骨が張つて行けると云ふ見越がつかんことにや私ア不安心で、逆も噂など持つ氣になれやしない。噂アを持ちや、子供が生れるものと覺悟せんけアなんねえしね。」と其淋しい顔に、不安らしい笑を浮べた。

けれども新吉は、其必要は感じて居た。註文取に歩いて居る時でも、洗湯へ行つて居る間でも、小僧ばかりでは片時も安心が出来なかつた。帳合や、三度々々の飯も、自分の手と頭とを使はなければならなかつた。新吉は、内儀さんを貰ふと貰はないとの經濟上の得失などを、深く綿密に考へて居た。一々算盤珠を弾いて、口が一つ殖えれば如何、二年経つて子供が一人産れれば如何なると云ふこと迄、出来るだけ詳しく積つて見た。一年の店の利益、貯金の額、利子なども最少額に見積つて、間違のない處を、略見極をつけて、幾年目に何れだけの資本が出来ると云ふ勘定をすることぐらゐ、新吉に取つて興味のある仕事はなかつた。

三月ばかり、内儀さんの問題で、頭腦を悩まして居たが、矢張貰はずにはゐられなかつた。

お作は其頃本郷西片町の、或官吏の屋敷に奉公して居た。産は八王子のずつと手前の、或小さい町で、叔父が傳通院前に可成な輕節屋を出して居た。新吉は、或日わざ／＼汽車で乗出して女の産在所へ身元調べに行つた。

二

お作の宅は、其町の可成大きな荒物屋であつた。鍋、桶、瀬戸物、シャボン、塵紙、草履と云つた物をコテ／＼と駢べて、老鋪と見えて、黝んだ太い柱がツル／＼と光つてゐた。

新吉は直ぐ近處の、怪しげな暗い飲食店へ飛込んで、チビ／＼と酒を呑みながら、女を捉へて、荒物屋の身上、家族の人柄、土地の風評などを、抜目なく訊出した。女は油くさい島田の首を突出しては、酌をして居たが、知つて居るだけのことは話してくれた。田地

が少しばかりに、小さい物置同様の、倉のあることも話した。兄が百姓をして居て、弟が土地で養子に行つて居ることも話した。養蠶時には養蠶もするし、其方此方へ金の時賃などをして居る事も辯つた。

新吉自身の家柄との權衡から云へば、餘りドツとした縁邊でもなかつた。新吉の家は、今は悉皆零落して居るけれど、村では筋目正しい家の一つであつた。新吉は七八歳まではお坊ちゃんで育つた。親戚にも家柄の家が澤山ある。物は亡しても、家の格は然迄低くなかつた。

けれど、新吉は其様なことには餘り頓着もしなかつた。自分の今の分際では、それで十分だと考へた。

其事を、同じ村から出てゐる友達に相談してから、新吉は漸く談を進めた。見合は近間の寄席ですることにした。新吉は其友達と一緒に、和泉屋に連れられて、不斷着のまゝでヒヨコく〜と出掛けた。お作は薄ッぺらな小紋縮緬のやうな白ッぱい羽織のうへに、シヨールを着て、叔父と田舎から出てゐる兄との真中に、少し顔を斜にして坐つて居た。叔父は毛むくじやらの様な顔をして、古い二重廻を着てゐた。兄は菱なりの様な顔の口の大きい男で、此も綿ネルのシャツなど着て、土くさい様子をして居た。横向きであつたので、新吉は女の顔を能く見得なかつた。色の白い、丸ばかりだと云ふ事だけは解つた。お作は人の肩越に、ちよい〜新吉の方へ目を忍ばせてゐたが、新吉は胸がワク〜して、頭腦が酔つたやうに爲つてゐた。

寄席を出るとき、新吉は出てゆくお作の姿をチラリと見た。お作も振顧つて、正面から男の立姿を二度熟視した。お作は小柄の女で歩く様子などは、坐つて居るよりも多少好いやうに思はれた。

其處を出ると、和泉屋は不恰好な長い二重廻の袖をヒラ〜させて、一歩先にお作の仲間と一緒に歸つた。

「如何だい、どんな女だい。」と、新吉は私と友達に訊いた。

何だか頭腦がボツとして居た。叔父や兄貴の百姓々々した風體が、何となく氣に懸つた。でも厭で堪らぬと云ふ程でもなかつた。

三

明日は朝早く、小僧を註文取に出して、自分は店頭で精々と樽を滌いてゐると、まだ日影の薄ら寒い街を、急々と此方へやつて来る男がある。柳原ものの、薄ッぺらな、例の二重廻を着込んだ和泉屋である。

和泉屋は、羅紗の硬さうな中折帽を脱ぐと、軽く挨拶して、其ま店頭へ腰かけ、氣忙しきうに帶から眞入を抜いて眞を吸出した。「君の評判は大したもんですぜ。」と和泉屋は突如に高聲で辯り出した。「先方ぢやもう悉皆氣に入つちやつて、何が何でも一緒に爲たいと云ふんです。」

「冷評しちや可ませんよ。」と新吉は矢張ザク〜遣つてゐる。氣が氣でないやうな心持もした。

「いや眞實ですよ。」と和泉屋は反身になつて、「其で話は早い方が好いからツてんで、今日にでも日取を決めてくれると云ふんですがね、如何です、女も決して惡いて方ぢやないでせう。」と和泉屋は、其から女の身上持の好いこと、氣立の優しい事などをベラ〜と説立てた。星廻や相性のことなども辯じて、獨で呑込んでゐた。支度は素より有らう筈はないけれど、其でも好かれ惡しかれ、簞笥の一寸位は持つて来るだらう。夜具も一組は持込むだらう。左に右貰つて見給へ、同じ働くにも、如何に張合があつて面白いのか。あの女なら請合つて樹新のお釜を興しますと、小汚い齒齦に泡を溜めて説勸めた。

新吉は帳場格子の前の處に腰かけて、何やら物足りなさうな顔をして聽いてゐたが、「ぢや貰はうかね。」と首を傾けながら低聲に言つた。

「だが、來て見て、吃驚するだらうな。何ほ何でも、豈夫こんな亂

暴な宅だとは思ふまい。けど、まあ可いや、君に任しておくとしませう。逃出されたら逃出された時のことだ。」

「其様なもんぢや有りませんよ。物は試し、まあ貰つて御覽なさい。」

和泉屋は欣々のもので歸つて行つた。

其から七日ばかり経つた或晩、新吉の宅には、色々の人が多勢集つた。前の朋輩が一人、小野と云ふ例の友達が一人——此は殊に朝から詰めかけて、部屋装飾や、今夜の料理の指揮などしてくれた。障子を張替へたり、何處からか安い懸物を買つて来てくれたなどした。新吉の着るやうな斜子の羽織と、何やらクタ／＼の袴を借りて来てくれたも小野である。小さい口錢取などして、小才の利く、世話好の男である。

料理の見積を此男が爲てくれた時、新吉は優しい顔を擧めた。

「どうも困るな、こんな取着身上で、其様な贅澤な眞似なんか爲れちや……。何だか知んねえが、其引物とか云ふ物を廢さうぢやねえか。」

四

小野は怒りもしない。愛嬌のある丸顔に笑を漂べて、「然う客なことを言ひなさんな。一生に一度ぢやないか。此様な物を儉約したからつて、何程も違ふものぢや有りやしない。第一見窄しくて可くないよ。」

「でも君、私ア眞實の處酷苦面して婚禮するんだからね。何も苦しい思をして、虚榮を張る必要もなからうぢやないか。ね、小野君、私ア然う云ふ主義なんだぜ。君等のやうに慢して好い錢儲の出来る人たア少し違ふんだからね。」

「理窟は理窟さ。」と小野は笑顔を放さず、

「他の場合と異ふんだから、少しは世間體で云ふことを考へなくちや……。好いぢやないか、後でミツチリ二人で稼げば。」

新吉は黒い指頭に、臭い臭を摘んで、眞鍮の煙管に詰めて、炭の粉を埋けた鐵瓶の下で火を點けると、思案深い目容をして、濃い煙を噴いてゐた。

六疊の部屋には、もう總桐の簞笥が一棹据ゑられてある。新しい鏡臺も其上に載せてあつた。借りて來た火鉢、黄縐の座蒲團などが、縁の疊の上に積んであつた。丁度晝飯を済したばかりの處で、耳の遠い傭婆さんが臺所で其後始末をしてゐた。

新吉はまだ何やらクト／＼云つて居た。小野の見積書を手に取つては、獨りで胸算用をしてゐた。此處へ店を出してから食ふ物も食はずに、少許宛溜めた金が、既う三四十もある。其を此際大略噴出して了はねばならぬと云ふのは、新吉に取つて些と苦痛であつた。新吉は慍うした大業な式を擧げる意はなかつた。竊と興入をして、私と儀式を済す筈であつた。強ち金が惜しいばかりではない。一體が、目に立つやうに晴々しいことや、華やかなことが、質素な新吉の性に適はなかつた。人の知らない處で働いて、人に見着からない處で金を溜めたいと云ふ風であつた。どれだけ金を儲けて、何れだけ貯金がしてあると云ふことを、人に氣取られるのが、既に好い心持ではなかつた。獨立心と云ふやうな、個人主義と云ふやうな、妙な偏つた一種の考が、丁稚奉公をしてから以來彼の頭腦に強く染込んで居た。小野の干渉は、彼に取つては、餘り心持好くなかつた。と言つて、此男が無くては、此場合、彼は幾ど手が出なかつた。グヅ／＼言ひながら、分晰反抗する事も出来なかつた。

三時過になると、彼は床屋に行つて、其から湯に入つた。歸つて來ると、家はもう明が點いてゐた。

新吉は、「ア、」と言つて、長火鉢の前に坐つた。小野は自分の花嫁でも來るやうな晴々しい顔をして、「如何だ新さん待遠しいだらう。茶でも淹れようか。」

「莫迦言ひたまへ。」新吉は淋しい笑方をした。